

クローズアップ

NGO・NPO

学校法人

アジア学院

アジア農村指導者養成専門学校

共に生きるために

アジア学院の前身は終戦後間もない一九四八年に設立された農村伝道神学校で、農村牧師を養成する学校です。一九六〇年にアジアのキリスト教諸教会からの要請で、ここにアジア諸国の農村牧師を養成する「東南アジア科」が併設されました。一九七三年にこの「東南アジア科」が那須塩原市に移転・独立したのが(学)アジア学院です。アジア学院はアジア農村指導者養成専門学校を運営していますが、ともに栃木県に認可された法人と学校です。文部科学省の認可ではないので、公的な補助金・助成金は一切受けておりません。通常の学校ですと、入学した学生から入学金・授業料を受けますが、当校の場合に学生はアジア・アフリカ・大洋州等の途上国から来ますので、入学金・授業料などを払うことができません。

加えて往復の航空賃も負担する必要がありません。そこで運営費はすべて、日本国内外の寄付に頼っています。いわばアジア学院はNGOで、それも日本で最も古いNGOの一つです。

アジア学院はキリスト教主義のミッション・スクールで、その使命は「イエス・キリストの愛に基づき、個々人が自己の潜在能力を最大限に発揮できるような、公正かつ平和で健全な環境を持つ世界を構築すること」にあります。これを具現化するため、「共に生きるために」というモットーを掲げて、共に分かち合う生き方を目指して努力しています。一言で言うと国際人材養成機関で、ア

ジア・アフリカ・大洋州など途上国の農村地域で活動する民間開発団体(NGO)から、その土地に根を張り、その土地の人々と共に働く「草の根」の

村落開発ワーカーを学生として招き、自国のコミュニティの自助・自立を目指す農村指導者を養成しています。

アジア学院はミッション・スクールで学生はキリスト教徒が大半ですが、仏教徒・イスラム教徒・ヒンズー教徒などもおり、宗教の枠を超えて共存する共同体の構築を目指しています。国籍・民族・宗教・言語・習慣・教育・職業・年齢・性別等が全く異なるなど多様性・異質性に富んだコミュニティで、授業と生活すべて英語を共通語として行われています。

学生の応募条件は「少なくとも三年間の農村活動経験を有すること」なので、学生の平均年齢は三六歳と高く、既婚者は家族を残しての単身留学です。新婚早々に来日し、滞在中に故国で赤ちゃんが生まれる、というめでたい出来事もあります。研修期間



↑入学式後の集い

学校法人 アジア学院 アジア農村指導者養成専門学校

〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢442-1 TEL 0287-36-3111 FAX 0287-37-5833

e-mail : info@ari-edu.org URL : http://www.ari-edu.org/main.html

は九カ月で持続可能な農業・リーダーシップ・地域共同体の開発を体得します。

アジア学院のモットー「共に生きる」は言うに易く、行いに難いですが、不可能ではありません。従来から「同和」が言われてきましたが、これは読んで字のごとく「同じものが和すること」あるいは「同化」で、相手を自分の側に引き寄せることです。この場合相手は変わりますが、自分は変化しないので「共存半栄」です。大切なことは、さまざまなカルチャー・ショックを経て得られる「異和」で、相手の違いを認め、相互に受け入れること。相手も変わるが、自分も変わる。相違を認め、受容することで、自分も痛みを伴います。こうして初めて真の「共存共栄」になります。これを実行するためのキーワードは「分かち合い」です。労働を分かち合い、精神を分かち合い、果実を分かち合う。アジア学院では毎年新たな学生が来るたびに、これが繰り返されています。こうして個人とコミュニティーの内的成長が得られるのです。本年度は二五カ国から男子一七人・女子二三人計三〇人の学生が、有機農業による食糧自給とコミュニティーの自立を目指して研修しています。創立後三五年を経て、卒業生は五一カ国二〇〇人に及び、途上国で活躍しています。こうした卒業生の働きが高く評価され、二〇〇六年度に井植記念「アジア太平洋文化賞」を受賞しました。

現在、アジア学院は国際人材養成という本来業務のほかに、その多様性・国際性を

生かして、さまざまな取組みをしています。近隣の小中高学校との国際交流・国際理解プログラムや開発教育の実施、大学のゼミや研究室の研修の受入れ、有機農業を主眼にした青年海外協力隊の補完研修やJICA専門家・カウンセラー・パートナーの研修・視察先の受託等。また、ワークキャンプや研修会の受入れ、セミナーやワークショップの企画を実施しています。こうして、アジア学院を訪問される人は年間一五〇人以上になります。また、各種団体から講演依頼を受けて、啓蒙活動に当たっています。急速に進む国際化の波の中で、自治体として取り組むべき課題は多くありますが、何と云っても次代を担う若年層に対する開発教育・国際理解教育で、これは実は「人間教育」そのものなのです。



↑田植え

私は海外で通算一七年ほど活動し、五〇カ国ほどを訪問しましたが、外から見る日本人の典型的特質は島国根性と集団性です。異質を排除し、グループで行動することです。「赤信号、皆で渡れば怖くない」とはよく言ったものです。昨今の「いじめ」はまさにこうした性質に根付くもので、自分と異なるものを排斥し、無視することです。また、いじめっ子は一人ではできずに、集団でします。仲間外れにされるのが怖くて、いじめに加わるのです。

いじめられっ子は異邦人として扱われていますが、実は世界に一人しか存在しないユニークな存在で、自分を大切にしてほしいと思います。学校で話す機会があると、自分と同じ種類の友達だけを持つことは自分の世界を自ら小さくするので、なるべく自分と違う種類の友達をたくさん持つことを薦めています。こうした状況を克服するためには「異和」がキーワードとなります。外国人を受け入れることも同様に、異質性・多様性を受け入れることです。それによって生ずるカルチャー・ショックやさまざまな葛藤を経て、初めて異和がなされ、共生が実現されます。「共に生きる」とはそういうことで、「国際理解」はただ単に外国を知り、外国人と仲良くすることだけではなく、「いかに人間として生きるか」という問題であり、私達自身が内的に成長・変化することを問われています。

〈文責〉校長・野崎 威三男

クローズアップ

NGO・NPO

特定非営利活動法人

香川国際ボランティアセンター(KVC)

ラオスの教育支援
～輝くまなざしに魅せられて～

地方から国際協力

私達の名前はデッカイ「香川国際ボランティアセンター(KVC)」です。この会が発足したのは、香川県の外郭団体の香川県国際交流協会が、ラオスの都市や農村、タイのスラム街を訪ね、開発途上国の現状と国際協力に対する理解を深めるために企画した「ラオススタディツアー(一九九三年一月五日から二二日)」に参加した二二歳の女性から七七歳までの男性まで二二人が中心になってNGOを結成しました。当時の新聞記事には「PKOなど自衛隊の国際貢献を論ずるだけでなく、日本人ボランティアが活躍する現場を実際に見よう」と企画されたと掲載されています。結成したのは、一九九三年四月一日、香川県内で初めて結成された、県民の手による国際協力団体です。当時、国連ボランティアの中田厚仁さんがカンボジアで殺害された直後でした。まず中田さんへの黙祷から始まり、集まった会員一〇〇人程は静かに頭を下げての発足となりました。なぜこのような悲劇が起こったのかと、会員の意見交換から始まるという異例のスタートになりました。

会の目的を「『開発途上国の自立のための支援』と明確にしました。「自立させてあげる支援」は極力避けようというものでした。これまで一五年間、経済的には貧しいが、心豊かで平和な東南アジアの小国・ラオスの人々の自立を主として支援してきま

した。ただ困っているから、何か物をあげればよいという単純な行動ではなく、本当に必要としているモノを、必要としている人に支援すること。また、一方的に支援してあげるのではなく、ワークショップや協力活動を通じて、スキルを高めたり、人間交流を深めることにも心配りをしてきました。また、ラオスからも学び、日本で生かそうという双方向性の姿勢も重視してきました。香川国際ボランティアセンターは、本当の国際協力とは何かなど、試行錯誤しながら活動している民間団体です。国際協力活動には一〇〇点満点はありません。

二〇〇三年五月に特定非営利活動法人(NPO法人)になりました。当時の理事長がいつも話していたことは「金のある人は金を出せ、知恵のある人は知恵を出せ、力のある人は力を出せ、何も無い人は汗を流せ」というものでした。それぞれの会員自身のできる範囲で活動を行っています。会員は高校生から九三歳まで、いろいろな人がいます。

ラオスの教育支援からスタート

これまでの一〇年間、ラオスの教育支援



↑川遊びをする子ども達

(特活) 香川国際ボランティアセンター

〒760-0080 香川県高松市木太町9区4365-8 (蓮井孝夫方)

TEL 087-865-3945

FAX 087-865-3945

e-mail : t-hasui@zephyr.dti.ne.jp URL : http://www.npokvc.org/



↑ピアノ・ワークショップ



↑ラオスの村の小学校



↑小学校建設ボランティア活動

のうち、小学校、職業訓練学校一校を建設しました。学校贈呈式での子ども達の笑顔を忘れることができません。その笑顔に惹かれて募金活動、学校建設に努力をしてきました。一校建設するには、地方のNGOとしては大変な努力がいります。趣意書を作り、五〇〇円募金として、一五〇〇人もの募金が集まり小学校を建設しました。完成式には「ラオススタディツアー」として香川県民に呼びかけ、二〇人以上の仲間で見地を訪問し、交流を深めました。村の人々の感謝の表情・笑顔が忘れられず、学校建設を進めてきました。

それだけで終わると、モノを寄贈したに過ぎません。私達は長くかかわるために、絵本の寄贈を行いました。日本の美しい絵本にラオス語を貼りつけた絵本を送り、子ども達が絵本を通じて字を勉強したくなり、学校に通うことを期待して活動しました。また、先生には音楽教育の一環としてピアノを贈りました。これも先生にメモディ・

リズムの指導を行ってきました。また、文集などを発行して学校と地域との交流を期待して贈写版を贈りました。この活動も、事前にワークショップをしました。

しかし、ある村に完成させた校舎の横に、いとも簡単に日本の支援の真新しい校舎が完成しました。地方のNGOは、一校建設するために大変な努力をして募金活動を展開したのに、いとも簡単にできた政府援助の校舎を見て私達は唖然としました。どちらも間違ったことはしていないことは事実ですが、「NGOのあり方」が問われたような気がしました。

私達の仲間の中で、「NGOの役割とは？」という議論が起りました。ニーズに応える基本は変わらないけれども、どのようなニーズに応えることが大切なことなのか話し合われました。ハード支援・ソフト支援いずれも重要だが、ハード支援から軸足をソフト支援に移そうということになりました。では何をすればいいのか模索が続きました。

「未来塾」から世界を見る・自己を見つめる

その中の一つ「かがわ国際ボランティア未来塾」を実施することが二〇〇三年に決まりました。この年は私達がNPO法人を取得した年でもあります。そしてこの「かがわ国際ボランティア未来塾」の実施目的を「香川の青少年に、開発途上国への国際理解、国際ボランティアの役割などについて理解してもらい、香川から国際的に活躍できる人材や、国際ボランティアの人材の輩出の一助とするために、事前研修・事前活動を十分行い、現地ラオス(開発途上国・アジアの最貧国)では、青年海外協力隊員の活動現場を視察、現地の小学校の子ども達との交流、ラオス人家庭でのホームステイ、さらにベトナム戦争時の不発弾処理現場視察など」としました。既に五回実施し、高校生・教師らがラオスを訪れました。



↑不発弾探知機・高校生



↑ホームステイ先での歓迎儀式

〈文責〉香川国際ボランティアセンター

代表理事 蓮井 孝夫